

藤沢駅北口から遊行通り商店街を歩いて行くとロータリーに出る手前右側に寂れた庚申堂がある。藤沢宿を訪れようようとする人でもスルーしてしまう。おまけに鉄柵があり施錠してあるから立ち入ることはできない。庚申堂の寛文13年（1672）の本尊、庚申供養塔は藤沢市指定有形民俗文化財として指定を受けている。この庚申堂に小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が明治25年（1892）、江ノ島見物の帰途、関心をもちわざわざ立ち寄った話が名著とされる「知られぬ日本の面影」の中にある「江ノ島巡礼」にあるというから、どう描いているか知りたくなる。



小泉八雲

小泉八雲（1850~1904）、ギリシア生れ、アメリカで新聞記者をした後、日本文化に関心を持ち、1890年来日、松江で中学の英語の教師、1891年士族小泉湊の娘、節子と結婚し小泉八雲と名乗る。五高（熊本）の英語教師をしたのち、1896年東大の英文教師、日本に帰化。1904年（明治37）に54歳で亡くなるまで、多数の日本の民俗、民話など13冊の本を残した。私は八雲の著作のうち2作品に接している。一つは小5のとき、国語の教科書にあった「稲むらの火」である。あらすじは「紀州のとある高台に住む庄屋が地震の後海水が沖合に退いていくのを見て津波が来ると予測し、村人を避難させるため暗闇の中、稲むら（刈り取った稲の束）に火をつけて回り高台に避難させ村人の命を救ったという話」である。この話は2011・3・31東日本大震災後、防災教育の教訓として見直された。もう一つは、高2のとき英語の副読本が八雲の「怪談・耳なし芳一」であった。教師は入試によく出るからという話であったが、松江の出身で八雲の信奉者であったからしばしば脱線した。

「江ノ島巡礼」は藤沢市総合図書館にあった。人力車に乗って古寺巡礼、江ノ島では弁財天、洞窟、そして精巧にできている土産物の江ノ島貝細工に関心を示している。YR江ノ島みちに貝細工加工所がある。八雲の作品の中に細工の素晴らしいことが書かれていますよ。とお伝えしたら、昭和になってからの創業という。

八雲が江ノ島からの帰途、藤沢へ向かう路傍の庚申にひかれる。これに似たものが藤沢の庚申堂にあると聞き、庚申堂を訪れる。しかし荒れた境内に落胆しながらも石像を丹念に観察、番人に「庚申の絵を買いたい」と言うと、絵は売っていないが、掛け軸があるから持って来る」という。「番人は掛け軸を持って戻って来た。小さなほこりだらけの古びて黄ばんだ掛物で、千年もたったものらしい。が、それを紐解いて私は失望した。ただ庚申の普通の絵、輪郭だけのものだった。それを観ているうちに、私は初めて周囲に群衆が来ていることに気が付いた。野良仕事から来た親切そうな日に焼けた顔の百姓ども、赤ん坊を背負ったお母さんたち、小学校の子供、車夫などが皆外国人がどうしてこんなに彼らの拝む神々に興味を感じているのかと不審がっているのだった。そして周囲からの圧度は極めて柔らかで、しかも生温かい水が身に当たるようなものであったが、私は幾分当惑した」。「藤沢の文学」の著者北沢瑞史は「藤沢の人々がいきいきと登場している。その藤沢人への八雲のやさしい眼と、素朴な村人のやさしさが、あるななつかしきで結ばれていることに注意しておきたい」と述べている。

八雲の帰るべき汽車の時刻がきたときである。「機関車の汽笛が丁度列車に間に合うだけ、時間のあることを

警告した。それは西洋文明の鉄道網が、すべて原始的な平和を征服しているからである。哀れ庚申の神よ、これは汝の道路ではなくなった！ 往昔の神々は西洋文明の石炭の残灰をまき散らす路傍で、死に瀕しつつあるのだ」と言い残して、小泉八雲は藤沢を去るのだが、そこには、西洋文明が日本の文化を蹂躪してゆく姿に対する痛烈な批判と、前近代性を持った八雲の精神を見る思いがする」（前出、北沢瑞史）。



戦後、昭和 30 年代頃まで庚申塔は田舎みちで見ることができたが、道路の整備によってどこかへ集められるか消えてしまった。庚申塔は江ノ島みちミネベアの脇にわずかに残っている。「**庚申とは歴法の 60 日ごとに巡ってくる庚申の夜に、三しという虫が睡眠中に身体から抜け出して天帝にその人の罪過を知らせ、天帝がその人の寿命を決定するという信仰（道教の説）があった。三しが天帝に告げさせないため、庚申の夜は眠らずに明かすというのが**庚申待ち**。室町時代から**庚申講**ができ、庚申さまを祈り、夜を徹して語り明かす風習が広まった。また 60 年ごとに庚申塔、庚申塚を建てることを原則とした。庚申の申から猿の信仰と結びつき、猿を神使とする**山王信仰**と結びついた。江戸時代には**青面金剛**（しょうめんこんごう）を本尊とする庚申堂が有名となり、庚申待に青面金剛の画像を掲げる風習が広まった。庚申は風邪、せきなどの治病神、作神、福神とみなされている」（図説：民俗探訪事典山川出版）**

庚申堂の脇には江ノ島みちなどから集められた庚申塔が並んでいる。青面金剛の掛け軸は 60 年に一度御開帳され、次に開帳されるのは 2040 年という。ここの青面金剛のお姿ではないが、上の写真のごとくである。何故、八雲が日本の民俗、神々に興味、関心を抱き日本にやって来たのであろうか、私が勝手に想像するところ、母親の影響が大きくあったのではないか。母親はギリシャ人であった。ギリシャは多神教であり、色々な神様が存在する。日本は多神教、八百万の神の国、草木、石ころにいたるまで神が存在する。その本拠地たるが出雲の国、出雲大社のある松江である。であるから、最初に松江にやって来たのには蓋然性があると思うのだからいかがであらうか。

参考資料：「藤沢の文学」 北沢瑞史 「江ノ島巡礼」 八雲の経歴については [Wikipedia](#)  
「藤沢史跡めぐり」 藤沢文庫刊行会編 図説：民俗探訪事典山川出版